

「すべての民の祈りの家」井上隆晶牧師
イザヤ書 56 章 1～8 節、使徒言行録 3 章 1～8 節

❶【神があえて苦しみを与えられる理由】

イザヤ書 56 章から最後の 66 章までは、聖書学者の間では「第三イザヤ」と呼ばれています。イザヤ本人が書いたのではなく、その弟子たちがイザヤの名前を使って書いたものです。イスラエルの民がバビロン捕囚の生活から解放されてエルサレムに戻り、破壊された神殿を再建した頃に書かれました。バビロン捕囚は 70 年間続きました。70 年と言えは人のほぼ一生ですから、バビロンでの生活基盤がもう出来てしまっています。それをすべて捨ててエルサレムに帰るというのは、よっぽどの勇気と信仰がなければできない事です。ですから皆が帰ったのではなく、一部の民だけが帰ったようです。そしてペルシャに残った民が、聖書の信仰を広めたのです。その伝道が、イエス様が降誕した時、東方からメシアを拝むために来た学者につながっているのです。

さて、帰ってきた民は神殿を再建したのですが、粗末なものであり、土地は荒れており、生活はとても苦しかったようです。帰りさえすれば何とかかなるという彼らの希望は無残にも打ち砕かれてしまいました。彼らの信仰は危機に瀕していたのです。そうした中で書かれたのが旧約聖書の中の律法の書だそうです。

●昨日、大阪府宗教連盟の総会で一心寺に行ってきました。一心寺は、平安時代末期から鎌倉時代初期の僧、法然上人が開いたお寺です。法然上人は浄土宗を広めました。一心寺と言えば納骨寺として有名です。一心寺は江戸末期から死者のための祈りを毎日行うようになり、そこからお骨を納める人が増えたのでお骨仏を作り出したそうです。現在八体のお骨仏があり、一体の仏像に 23 万人分の骨が入っているそうです。冒頭の挨拶で京都のお坊さんが「今年は暑かったので紅葉が美しくありません。紅葉というのは昼と夜の寒暖差が激しいと美しくなります。自然というのは良くしたもので、苦しみがあると美しいものを生み出します。火山があるから温泉もあるわけです。」と言われました。

この話を聞いて、自然界も苦しみの中で何かを生み出してゆくのだと思いました。イスラエルの民も同じです。バビロンにいても苦しみ、エルサレムに帰ってきても苦しみが待っており、神様はイスラエルになかなか平安を与えてくれません。私たちも同じです。でもそれが実は、信仰を生み出すための神の計画だったのだと思います。祈らないとやっていけない、生きて行けない状況にいつも追い込むという事です。それが実は恵みだったのです。なぜなら神は苦しみだけではなく、その中に必ず宝を入れて与えて下さるのです。苦しんだ人は必ず、何かの美しい実を残すのです。

②【新しいイスラエルの民の誕生】

律法が書かれるようになると、異邦人や宦官といったような人たちが差別をされるようになってきました。そんな希望を失う彼らにイザヤは神の言葉を告げます。

「主はこう言われる。正義を守り、恵みの業を行え。わたしの救いが実現し、わたしの恵みの業が現れるのは間近い。」（イザヤ 56：1）諦めないで正義を行い、恵みの業を行い続けなさいと言うのです。具体的には「安息日を守り、それを汚さない」ことと、「悪事に手をつけないように自戒する」ことです。今の私たちなら、礼拝を守り、キリストの教えを守りなさいということです。3節にはもっと詳しく「主のもとに集まってきた異邦人は言うな。主はご自分の民とわたしを区別される、と。宦官も言うな。見よ、わたしは枯れ木にすぎない、と。」と書かれています。異邦人よ、あなたがたは「自分たちは神の民ではない。神はご自分の民と私たちを区別しておられる」と言ってはならない。また宦官よ、あなたがたは「自分たちは枯れていて役に立たない」と言ってはならない、と言うのです。ここで言われているのはユダヤ人でも、異邦人でも、宦官でも、つまり、どんな人であっても、安息日を守って礼拝し、神の望まれることを行い、神の教えを守るならば、神に受け入れられ、その祈りは聞かれ、その名も記憶されると言うのです。大事なことは神に従うことです。神様はここで新しいイスラエルの民を生み出そうとされているのです。もともと「イスラエル」というのは民族の名前ではなく、神を信じる信仰者の名前です。ですから私たち教会は「新しいイスラエル」と呼ばれるのです。そしてこの後に有名な言葉が出て来ます。「わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。」（イザヤ 56：7）神の家とは、神殿であり教会です。教会は神を敬い、神に従おうとするすべての人の祈りの家であって、神はご自分に従うどんな人の祈りも聞いて下さるのです。

③【キリストだけを頼ろう】

使徒言行録を見ると、ペトロとヨハネは生まれながら足の不自由な男の人に「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」（使徒 3：6）と言って彼を癒し、歩けるようにしました。この生まれながら足の不自由な男は、今までは人を支えにして生きてきたのですが、これからはキリストを支えとして生きる生き方へ変わったのです。キリストを信じた時、彼は自由になり、自分の足で歩き始めたのです。ここに新しいイスラエルの民が誕生したのです。

●12日（日）に西野田鶴見橋教会の新会堂献堂式に参加してきました。立派な広い礼拝堂でした。新会堂を建てるために50年間かかったといひます。信徒の方が私に「先生、50年かかりましたが神様が動いたら早いすわ。あつと言う間でした。」と言っておられました。大阪西野田教会は、鶴見橋教会と合併し、鶴見橋教会の土地建物が8000万円で売れたので、そこからは早かったというのです。そこまでに多くの牧師や信徒たちの祈りと努力と犠牲がありました。

●新潟にある敬和学園高校の校長をしている榎本栄次先生はこうに言っています。「人間はどんな人でも絶望する。親しい友、愛する者との別れ、持っている者との断絶がやってくる。…しかし神と交わると平安がやってくる。この平安は人間が築き、蓄えてきたものではない。こちら側にあるものではなく、それが断ち切られたところに神の側からやってきた平安である。神との交わりから得られたものである。それは誰も盗ることも裂くこともできない平安である。」

私たちが絶望したり、失望したりする時というのは、だいたいこの世のものを頼りにしている時です。自分に頼り、家族に頼り、自分の周りの人に頼り、自分の周りの状況に頼っている時です。そして「ああ、この人も頼りにならない。ああ、この人も助けてくれない」と言い、自分の周りの状況を見て「何も奇跡は起きない」と言い、自分を見て「自分にはお金もない、能力もない」と言うのです。そして気持ちが落ち込み、絶望するのです。この世を見るところからは希望は来ません。希望は神とキリストから来るのです。そして神から来たものは消えないのです。必ず何かを起こし、何かを始め、驚くべきことをします。だからこの世に頼ってはいけないのです。キリストだけを見つめ、キリストだけを頼りにしましょう。キリストが動けば救いは早いのです。「人間に頼るのをやめよ。鼻で息をしているだけの者に。」（イザヤ 2：22）です。もう少しで悪魔の罠にはまるところでした。気をつけましょう。